

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「 社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発
: 健康な「個立」を目指して 」

太刀川 弘和
筑波大学 医学医療系 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル	4
2-4. 実施内容・結果	5
2-5. 会議等の活動	16
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	16
4. 研究開発実施体制	17
5. 研究開発実施者	19
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-1. シンポジウム等	22
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-3. 論文発表	23
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	23
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	25
6-6. 知財出願	25

1. 研究開発プロジェクト名

社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康的な「個立」を目指して

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

・スモールスタート期間の目標

社会的孤立・孤独についての定義を定め、孤立にかかわる顕在的・潜在的指標の開発にむけた概念の確立を目指す。同時並行して、孤立のために不可視化されたひきこもり者を調査し、前述の概念が臨床的に妥当かどうかを検証する。コロナ禍における、社会的孤立の深刻化のプロセスを質問紙・面接調査によって解明する。

・本格研究開発期間の目標

本格研究では、健康人を対象に社会的孤立化の心理的プロセスを実験的に検討する。その結果が、ひきこもり者や精神障害者に当てはまるかどうかを臨床的に検証する。SNSの投稿データも解析し、孤独感の変容を検討する。また、経験サンプリング法による調査を実施し、社会的孤立や一時的孤独が生じやすい状況や、それらへの効果的な対処について検討する。

スモールスタート期間において得られた概念モデルから指標を開発し、例えば教育プログラム前後での指標評価などにより、PoCを実施する。さらに、心理的プロセスの検証から得られた知見を応用した介入プログラムと社会的孤立者のインタビューを踏まえたドラマ形式のメディア教材を開発し、地域住民への研修により実践をめざす。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

■総括グループ

Q1. 作成した孤立孤独予防教育・研修プログラムの教育効果は？

■精神医学グループ

Q1. ひきこもり支援者からみた支援の抑えておくべきポイントはあるか？

Q2. 笠間市の住民のひきこもりの現状がどうなっているか？（社会心理Gと共同）

■実験心理学グループ

Q1. ひきこもりへと至る社会的孤立のリスク評価を作成できるか？

Q2. 孤立傾向の高い人の認知的処理の特徴はどのようなものか？

■臨床心理学グループ

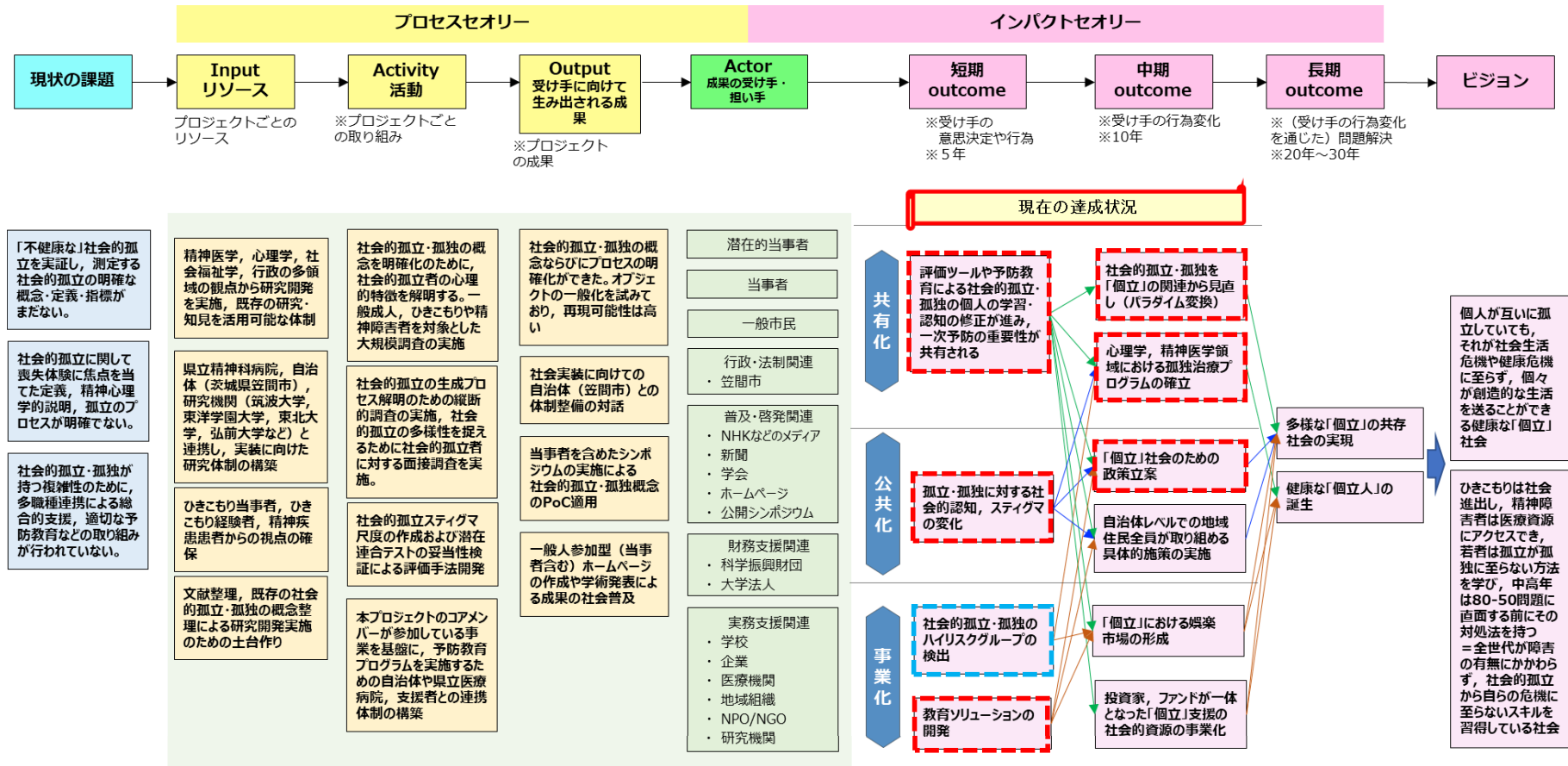
Q1. 孤立や孤独とは、どのような概念なのか？

Q2. 社会的孤立に対するスティグマを軽減するために有効な介入とは？

■社会心理グループ

Q1. 孤立の心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのか？

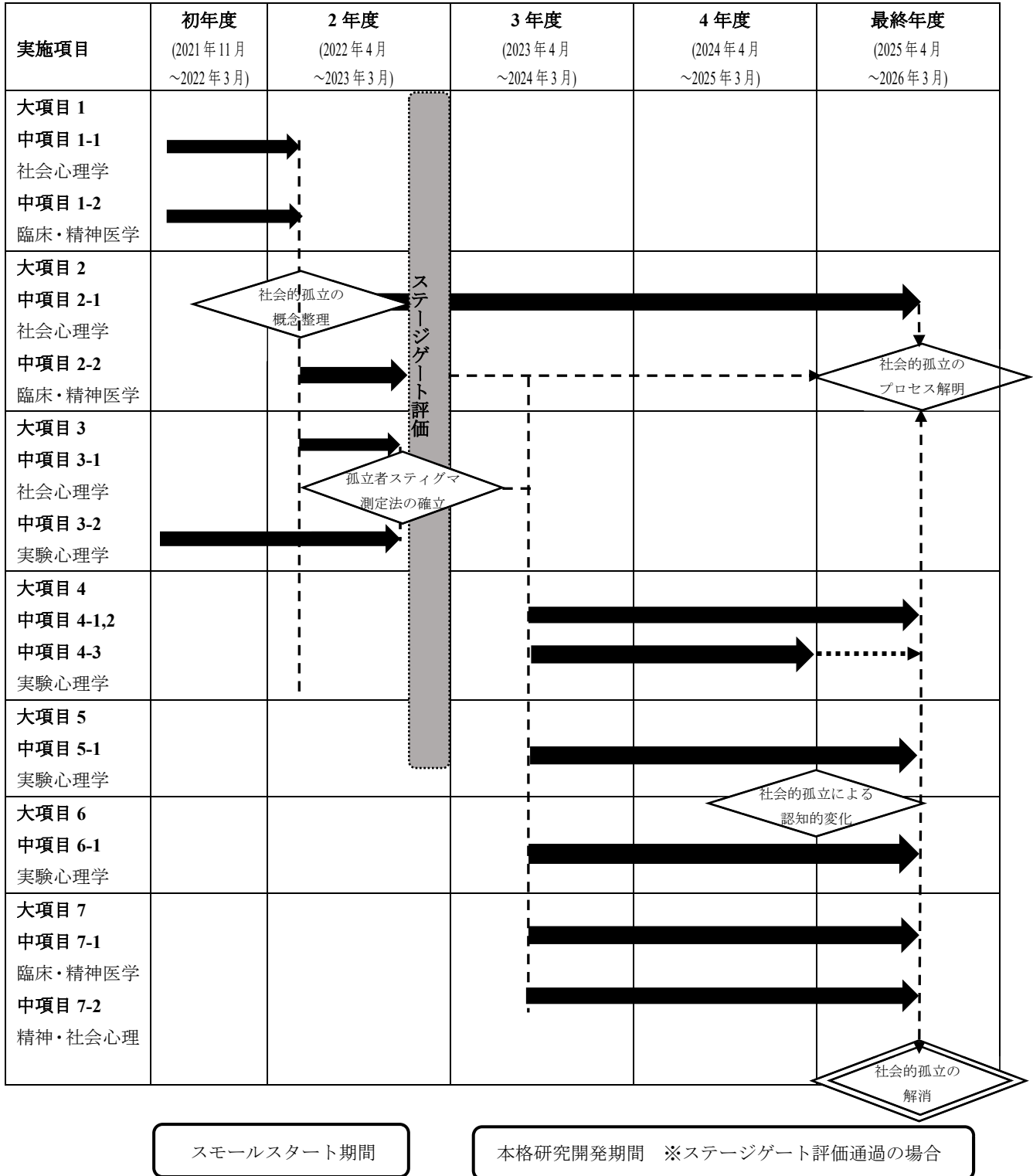
2-3. ロジックモデル



2024年11月時点

2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

社会的孤立者の心理的変遷の解明

実施項目②-1：孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯

実施内容

社会的孤立は、社会から居場所を失う「喪失体験」と捉えることができる。喪失体験後の心理的過程には否認、怒り、抑うつといった様々な反応が出現する。孤立という喪失体験における心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのかを検証することで、社会的孤立のメカニズムの解明につながると考えられる。今回は、実施項目①-1で、社会的孤立状態にある回答者を対象に縦断的に複数回の調査を行う。さらに、SNSの投稿データを解析し、孤独感の変遷を検討する。加えて、社会的孤立や一時的孤独が高まる状況や、一時的孤独への効果的または不健康に至る対処について検討する。

期間：2022年7月～2025年12月31日（リスクヘッジ用研究期間：2026年3月31日）

実施者：太刀川弘和（《筑波大学》・《教授》）・相羽 美幸（《東洋学園大学》・《教授》）・菅原 大地（《筑波大学》・《准教授》）

対象：実施項目①-1の一般成人を対象とした調査において社会的孤立状態にある回答者を対象とする。対象者が少数の場合は、実施項目①-1の社会的孤立者の代替者のうち、縦断調査への承諾が得られた回答者も追加する。SNSの投稿データを縦断的に収集して、その変遷を検討する。また、青年期の大学生を対象に実施した経験サンプリング調査から、一時的孤独に対する効果的もしくは不適応的な対処法を検討する。

当該年度の到達点②

社会的孤立における認知的特性の検討

実施項目④-1：アイトラッカーによる社会的孤立傾向者の視覚的情報処理特性の検討

実施内容

ある情報に接したときの視線の動きは、言語化されない様々な認知過程を反映している。社会的に孤立した状態にある者は、スティグマを内在化することによって、社会的な情報（人の表情など）に関わる認知過程が歪み、一般成人と異なる認知処理を行っている可能性がある。この点について検討するため、社会的情報を呈示した際の視線について、アイトラッカーを使って社会的孤立者と一般成人の視線の動きを分析し、社会的孤立者の視覚的情報処理特性を明らかとする。その際には、スモールスタート期間・項目3(2)によって有効性を確認する潜在連合テストにより、社会的孤立によるスティグマの内在化の程度を変数に入れる。

期間：2024年4月～2025年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年7月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：社会的孤立傾向の高い一般成人40名を対象とする。

実施項目④-2：fMRIによる社会的排斥経験と潜在的孤立傾向の脳活動の測定

実施内容

社会的孤立によって他者との関わりが減少することで、脳機能にも影響が現れる可能性が

ある。例えば、表情認知においては、内側前頭前皮質と扁桃体と島が関わり、他者からの排斥は前部帯状回背側部の活動によって社会的な痛みとして表象される。したがって、社会的孤立者は、社会的情報の処理の基盤となる脳活動が非孤立者とは異なっている可能性がある。特に、他者との関わりから生じる不安などは、恐怖の条件づけに関連した神経回路の機能不全と関わることを示されている。そこで、社会的排斥課題（サイバーボール課題）中に生じる孤立感を特徴づける脳活動を測定すると同時に、脳の白質構造（神経線維構造）を機械学習を用いて抽出する。解析に当たっては、同時に測定する潜在的孤立傾向などの特性との関連を見ることで、排斥による孤立感を抑制あるいは促進する脳活動の特定を目指す。

期間：2024年4月～2025年7月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年12月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）・釣木澤朋和（《産業技術総合研究所》・《主任研究員》）

対象：一般成人60名である。

当該年度の到達点③

社会的排除による心理的反応の変化に関する実験的検討

実施項目⑤-1：長期的孤立が視覚的情報処理に及ぼす影響の検討

実施内容

社会的に孤立した状態にある者は、スティグマを内在化することによって、社会的な情報（人の表情など）に関わる認知過程が歪み、一般成人と異なる認知処理を行っている可能性がある。この点について基礎的な知見を得るため、社会的情報を呈示した際の注意のバイアスを検討する。具体的には、future-life-aloneパラダイムを導入し、仮想的な長期的排斥操作の後、表情への選択的注意課題、社会的ノイズ下での視線追従課題を行い、そのバイアスの一端を明らかとする。

期間：2023年7月～2025年7月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年12月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：一般成人60名を対象とする。

当該年度の到達点④

潜在連合テスト（IAT）のアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施項目⑥-1：潜在連合テスト（IAT）による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施内容

社会的孤立の予防という観点からすると、孤立の社会的スティグマを自身へ内在化する兆候を鋭敏に検出する必要がある。特に、義務教育終了後に孤立によって外部からの存在が把握できなくなりやすい傾向を踏まえると、義務教育後期に属する比較的若年層へのアプローチが不可欠である。この点に関して、偏見などセンシティブな対象に関する測定に対して、高い検出力を備える潜在連合テストは極めて有力な手段となり得る。そこで、潜在的な孤立傾向を測定するIATをWeb上で希望者が各自で実施でき、そのフィードバックを即時に得られるような体制の構築の可能性を検討する。スティグマを内在化する兆候が認められる場合には、適切な情報を提供可能になり社会的孤立の予防につながられる。

期間：2023年7月～2025年7月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年12月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：Web（プロジェクトHP）での任意参加者とする。

当該年度の到達点⑤

社会的孤立解消に向けた社会実装研究

実施項目⑦-1：顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

実施内容

一連の研究により、社会的孤立者へのスティグマを顕在的な測定する尺度と、簡易に測定するアプリが開発される。セルフスティグマ低減につながる認知行動療法のプロセス変数（作用機序を説明する変数）について縦断調査を行う。そして、セルフスティグマ軽減に効果的なプロセス変数を変容させる認知行動療法の技法を選定し、オンライン上で介入ができるシステムを構築する。介入研究用のアプリケーションを用いて、顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証を行う。対象者は、大学生40名程度であり、約1週間の介入を行う。社会的孤立IATや社会的孤立スティグマ、孤独感等をアウトカムとする。

期間：2023年7月～2025年7月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年12月31日）

実施者：太刀川弘和（《筑波大学》・《教授》）・白鳥 裕貴（《筑波大学》・《講師》）・菅原 大地（《筑波大学》・《准教授》）

対象：社会的孤立の予防として、大学生に介入をする。

実施項目⑦-2：社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な個立の実現

実施内容

地域・社会レベルの社会的孤立者へのスティグマを軽減するために、社会的孤立が解消するまでのプロセスをまとめたメディアコンテンツを用いた大規模な介入研究を実施する。介入の効果を高め、介入後も適切な情報資源にアクセスできるようにメディアリテラシーを向上させるための心理教育も実施する。2023年度では、スキルを学び、「ひとりであること」に対するスティグマの低減と「いきる力」の強化を目標とする孤立・孤独予防教育プログラム（e-BOCCHI:ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる教育）を開発した。その際、教師やスクールカウンセラーも実施することができるようなプログラムや教材の開発を目標とすることで、継続的に実現可能な孤立・孤独予防教育プログラムを目指す。他にも、すでに孤立している子供や大人向けのプログラムの開発を目指す。また、笠間市の住民を対象とした住民調査を実施し、住民の現状や支援ニーズの把握を行い、より適切な支援を検討する。笠間市の保健福祉部およびソーシャルワーカー、教育委員会に協力を仰ぎながら実施する。世間一般の人が社会的孤立者に抱くスティグマと、社会的孤立者が地域社会に対するスティグマを軽減させることで社会的孤立者が支援につながりやすくなり、「健康な個立」を実現できる社会への変容を目指す。本事業を展開させつつ、「孤立・孤独対策」という観点から、地域の対人援助者のネットワークを構築することを目指す。これらを踏まえ、笠間市をモデルとして自治体の相談窓口など市内の社会資源をわかりやすく紹介するリーフレット作成、市職員や学校関係者等へ孤立者の相談機能向上の研修活動を行う。

期間：2022年7月～2025年12月31日（リスクヘッジ用研究期間：2026年3月31日）

実施者：太刀川弘和（《筑波大学》・《教授》）・白鳥 裕貴（《筑波大学》・《講

師》)・相羽 美幸(《東洋学園大学》・《教授》)

対象：孤立前の段階にある中学生、80-50問題に直面する前の中高年、市職員や学校関係者を対象とする。

(3) 成果

研究開発要素「①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」についての研究開発結果・成果

本プロジェクトでは、社会的孤立・孤独メカニズムを理解するために、社会的孤立・孤独の概念を明確化することから始めた。そのために、一般成人、ひきこもり、精神障害者を対象に独自の大規模な調査を実施し、さらに他の大規模調査(JACSIS)のデータの二次解析を行って、社会的孤立者の心理的特徴の解明を試みた。その結果、精神障害者は社会的孤立や孤独のリスクが高いこと、COVID-19の蔓延に伴い、参加者全体で社会的孤立が増加する一方で、孤独感は必ずしも増加しないこと、孤独感は抑うつ症状を介さず直接的に自殺念慮と関連したことが示唆された。

続いて、社会的孤立の概念構造の解明を試みた研究では、社会的孤立者のタイプ分けを可能とする概念構造を確立し、社会的孤立・孤独の形態は多様であり、適応的な側面も不適応的な側面もあることが示された。また、研究者だけでなく、社会的孤立者の支援者が抱く包括的な社会的孤立者のイメージについても検討した。このことは、社会的孤立者研究・支援における研究者と実践者間の溝を埋めることにもつながると考えられる。

さらに、社会的孤立の生成プロセスを解明するための縦断的調査を実施しており、現在解析を進めている。また、社会的孤立に至った経緯やその深刻化のプロセスは複雑であり、その多様性を捉えるために社会的孤立者(本プロジェクトではひきこもり)、及び社会的孤立者への支援者に対する面接調査を実施した。これらの研究から、社会的孤立の生成プロセス・解消プロセスおよび統合的な社会的孤立の深刻化のプロセスが解明されると想定される。

一連の研究から、社会的に孤立している状況では、孤独を感じている人もいれば、そうではない人もいることが示され、社会的孤立・孤独の多様性が明らかになったといえる。これらの調査結果を公表し、社会全体で社会的孤立・孤独の多様性や社会的孤立に至るプロセスを理解することによって、社会的孤立・孤独が苦痛を生まない新たな社会像のさらなる抽出につながると考えられる。

研究開発要素「②人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」についての研究開発結果・成果

社会的孤立者が容易に社会復帰できず、支援にもつながりにくい要因として、社会的なスティグマが存在すると考えられる。この社会的スティグマを測定するために、大規模調査の回答や、ひきこもりのインタビュー結果を参考に、4側面×7項目の計28項目から成る社会的孤立者に対するスティグマ尺度を作成した。さらに、スティグマを自身へ内在化しているかについて検討するために、潜在連合テストの開発と妥当性の評価を試みている。現時点での主な結果として、潜在的孤立スティグマが高く潜在的自尊感情が低い場合、他の群と比較して、幸福感が低く、孤独感と抑うつ傾向が高いことが明らかとなっている。

以上の研究により、社会的孤立者に対するスティグマ尺度では、社会的孤立に対するス

スティグマを簡易に測定することが可能となり、潜在連合テストでは社会的孤立者の顕在的・潜在的なスティグマを測定するツールとなる。これらのツールは、本格研究期間における介入研究での活用を想定している。

研究開発要素「③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」についての研究開発結果・成果

本プロジェクトでは、発足時から精神医学、心理学、社会福祉学、行政の多領域の観点から研究開発を推進することが可能な体制を整えており、週1回の頻度で開催している社会的孤立・孤独についての勉強会や定期的な研究会議によって、プロジェクトメンバー間の共通認識や協働体制をさらに綿密なものにしている。

また、本プロジェクトのコアメンバーはすでに笠間市市民を対象とした自殺予防対策事業、ひきこもり支援事業を実施しており、プロジェクトを推進していくための基本的な研究体制を構築していた。中学生を対象とする社会的孤立・孤独の予防教育プログラム（e-BOCCHI：ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる教育）を当研究班で開発した。同プログラムは実際に、笠間市内の全ての中学校、埼玉県春日部市の中学校二校に授業を実施し、一定の教育効果をあげることができた。

笠間市の住民を対象とした「地域で孤立している方々に対する支援方法に関するアンケート調査」と題した住民調査を実施し、各種ひきこもり基準での市内の社会的孤立者の人数推計を行った。精神医学グループでは、ひきこもり当事者への支援を行う一般社団法人、行政の職員3名へ支援のニーズ等をインタビュー形式で実施をした。

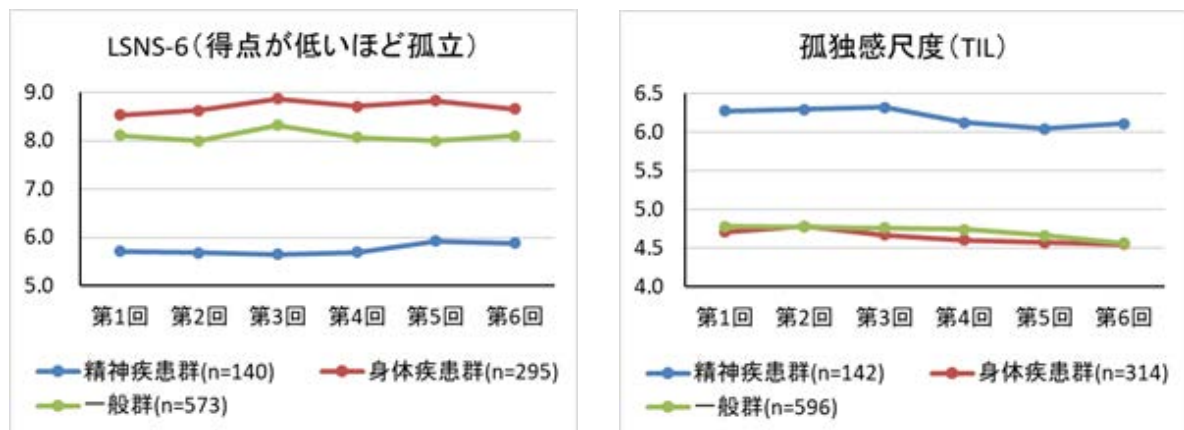
当該年度の到達点①

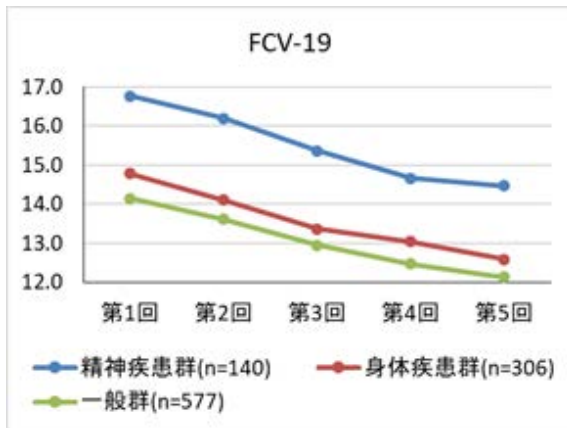
社会的孤立者の心理的変遷の解明

実施項目②-1：孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯

成果

縦断調査の第6回調査を2024年9月、第7回調査を2025年3月に実施した。第6回調査時点での継続回答者は1,068名（継続回答率31%）であった。精神疾患群、身体疾患群、一般群の6時点の社会的孤立と孤独感、5時点のコロナ恐怖の変化を検証した結果、社会的孤立には変化がなかったが、孤独感とコロナ恐怖は有意に減少していた。また、精神疾患群がその他の2群よりも有意に孤立しており、孤独感とコロナ恐怖が高かった（下図参照）。第7回調査については、今後解析していく予定である。





当該年度の到達点②

社会的孤立における認知的特性の検討

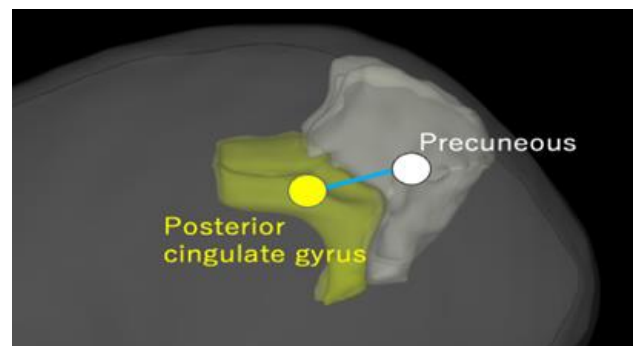
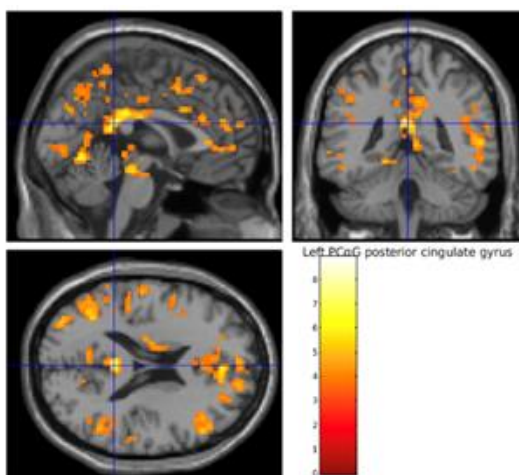
実施項目④-1：アイトラッカーによる社会的孤立傾向者の視覚的情報処理特性の検討
成果

一般成人60人を対象に、実施項目⑥-1にて開発を行ったIATをはじめ、各種指標を用いて社会的孤立傾向と認知的特性との関係を探るアイトラッカー実験を計3つ行った。具体的には、社会的音声ノイズを流しながら画面上を移動するドットの滑動性追従運動の速度と滑らかさを測定する課題、複数の表情を観察する課題、日常場面の写真を観察する課題である。アイトラッカーデータは膨大な量であるため、現在データの分析を続けている。

実施項目④-2：fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討

成果

一般成人を対象として、社会的排斥課題（サイバーボール課題）の最中の脳活動と、IATなどの指標との間の関連を解析した。その結果、潜在的孤立感と排斥中の脳活動の間には特徴的な関連は見られなかったものの、潜在的自尊感情は排斥中の右中前頭回・右後部上側頭回・左後部上側頭回・右前部海馬傍回・右淡蒼球などと特徴的に関連があることが明らかとなった（左下図参照）。加えて、脳領域間の結びつきの強さを検討するため、機能的結合の解析を行ったところ、潜在的自尊感情とデフォルトモードネットワーク（DMN）内の機能的結合に負の相関が見られた（右下図参照）。



当該年度の到達点③

社会的排除による心理的反応の変化に関する実験的検討

実施項目⑤-1：社会的排除経験の積み重ねによる心理的変遷の検討

成果

一般成人60人を対象に、長期的排斥の効果を検討するため、これまで社会的排斥操作として主に用いてきたサイバーボール課題ではなく、Future life alone課題を用いた(Twenge et al, 2001)。この課題は、サイバーボール課題とは異なり、他人との繋がりを持たないひとりぼっちで孤独な将来像をフィードバックすることで、より長期的な排斥による影響が表れるとされている(Bernstein & Claypool, 2012)。現在、各種指標との関連を分析中である。

当該年度の到達点④

潜在連合テスト (IAT) のアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施項目⑥-1：IATのアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

成果

昨年度までに作成した潜在的孤立を測定するIATの精緻化のため、合計1000名を対象としたWeb調査を2回実施した。その結果、他変数との関連から見ても妥当性が高く、かつ従来の顕在的な指標ではとらえることができなかった深刻な孤立へとつながるリスクを評価できる可能性が示された。加えて、従来のIATに比べ、測定時間も短縮できたため、より簡便な形でリスク評価を行うことが可能であると考えられる、そのため、HPなどで公開に向けた準備を行っている。

当該年度の到達点⑤

社会的孤立解消に向けた社会実装研究

実施項目⑦-1：顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

成果

予備調査を踏まえて、顕在・潜在的セルフスティグマ低減に向けた認知行動療法のプログラムを独自に作成した。このプログラムには総括Gが作成した「大人向けの社会的孤立・孤独のドラマ仕立ての映像教材」を使用している。映画で学ぶ孤独感とその対処というコンセプトの元、映画を通して「孤独の心理教育」「ポジティブな孤立」等をテーマにした6つのワークをアプリで実施していく。

介入を提供するためのアプリの改良も終わり、令和7年度には介入実施を予定している。

実施項目⑦-2：社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な個立の実現

成果

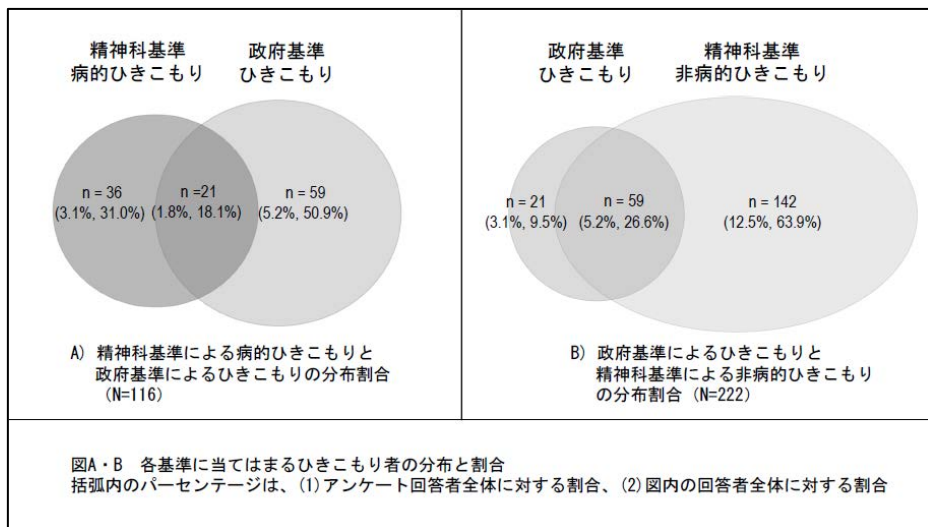
社会的孤立・孤独の予防教育プログラム「ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる教育：education for Boosting Communication and Confidence for Healthy Independence (e-BOCCHI、イーボッチ)」を当該年度に開発した。この授業は「1回目：ひとりぼっちでいることについて、いろいろな考え方を学ぶ」、「2回目：ゆ

るやかな人間関係の大切さを知り、その作り方を学ぶ」、3回目「ひとりでも楽しい過ごし方、相談できる場所SOSの出し方を学ぶ」の全3回で構成されており、授業を通じて「ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる」ことを全体の目標としている。令和5年度に引き続き、茨城県笠間市教育委員会の協力のもと、笠間市の中学二年生に対して孤立孤独予防教育プログラムを実施した。また東京都の堀越学園の学生に対して授業を実施した。

他に、内閣府孤独・孤立対策推進室とオンライン会議を実施し、孤立孤独の予防に関して様々な知見を交換した。授業への見学を内閣府孤独・孤立対策推進室より打診され、授業の見学の実施を行った。更に笠間市より打診をされ、笠間市の自殺対策計画「いのちを支えあえる地域づくり計画 ～第2期笠間市自殺対策計画～」に孤立孤独予防教育プログラムを継続的に今後も実施することとなった。これまでの社会的孤立・孤独の予防教育プログラムの成果をまとめ、現在論文投稿を進めている。

また昨年度実施した、笠間市の住民を対象とした「地域で孤立している方々に対する支援方法に関するアンケート調査」と題した住民調査の論文化を行った。この調査は、2024年2月から3月にかけて、茨城県笠間市の住民（男女各2,000人）を対象に郵送質問紙調査を実施した。（有効回答1,137件、回答率28.4%）

回答結果から、精神科基準の「病的ひきこもり」「非病的ひきこもり」、および政府調査基準の「社会的ひきこもり」の3つのグループに該当する住民の人数をそれぞれ算出することができた。各グループの関係は、下図に示すように、病的ひきこもりと分類された57人のうち21人が、政府調査の社会的ひきこもりにも分類された。また、非病的ひきこもりと判定された201人のうち、59人が政府調査の社会的ひきこもりと分類され、社会的ひきこもりは、病的ひきこもり、非病的ひきこもりのいずれにも含まれた。この論文はJST・筑波大学・茨城県・東洋学園大学と共同プレスリリースとして、国内外に公表をした。



次年度は、社会的孤立・孤独の予防教育プログラムの実施を継続的に実施し、かつ現場の教職員でも実施できるように体制づくりを進めていく。他にもすでにひきこもりとなつてしまった子供を対象とした教育プログラムを作成する予定である。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

■総括グループ

Q1. 作成した孤立孤独予防教育・研修プログラムの教育効果は？

授業実施前後で比較をすると、孤独感と抑うつは減少し、援助要請と自尊感情は増加した昨年度の結果を、今年度に論文化することができた。現在査読待ちである。

今後は更に社会実装を広めるために、以前に作成をしたホームページやシンポジウム開催を通して広く周知していく。

■精神医学グループ

Q1. ひきこもり支援者からみた支援の抑えておくべきポイントはあるか？

ひきこもり当事者と当事者を支援する者へのインタビューをまとめ、どのようなポイントがあるかを検討中である。孤立・孤独がどのように発生し、どのように維持されているか、そのメカニズムについて仮説形成を行っている。

Q2. 笠間市の住民のひきこもりの現状がどうなっているか？

2024年2月から3月にかけて、茨城県笠間市の住民（男女各2,000人）を対象に郵送質問紙調査を実施した。笠間市のひきこもり数を正確に推計するために、人口属性比率に基づいた補正集計（ウェイトバック法）を行った。（有効回答1,137件、回答率28.4%）

病的ひきこもりと分類された57人のうち21人が、政府調査の社会的ひきこもりにも分類された。また、非病的ひきこもりと判定された201人のうち、59人が政府調査の社会的ひきこもりと分類され、社会的ひきこもりは、病的ひきこもり、非病的ひきこもりのいずれにも含まれた。人口構成による推計により、笠間市（人口約7万3千人）では、4,239人が政府調査基準の社会的ひきこもり、8,972人が精神科基準の非病的ひきこもり、5,096人が精神科基準の病的ひきこもりに該当すると推計された。この結果は笠間市と共有し、次年度以降に笠間市の施策に提言をしていく予定である。

■実験心理学グループ

Q1. ひきこもりへと至る社会的孤立のリスク評価を作成できるか？

今年度の成果により、IATによって不適応な孤立へとつながるリスク評価が可能であることが示唆された。加えて、ブロック順序による測定の変りや実施時間の長さなども改善され、より簡便な形で実施できる見通しが立った。現在、分析中ではあるものの、脳活動や視線データなどの非言語的指標との関連を見ることで、より妥当性を高めていく。

Q2. 孤立傾向の高い人の認知的処理の特徴はどのようなものか？

fMRIにより、社会的排斥経験時の脳活動に大きな個人差はないものの、社会的排斥経験後の受容に対する反応に個人差があり、自尊感情の潜在的側面と顕在的側面でそれぞれ異なる脳活動を予測することが示された。視線データについては分析中である。

■臨床心理学グループ

Q1. 孤立や孤独とは、どのような概念なのか？

これまで実施した調査研究を踏まえると、孤立や孤独（孤独感）は類似した概念ではあるが、1人であることが必ずしも不適応にはつながらない「孤高」といった概念や、無理やり物理的に離された「隔絶」、1人で生活をしている「单身」といった概念に区別されることがわかった。少なくとも、孤立・孤独（孤独感）は不適応を表す単一の概念ではなく、適応・不適応といった次元を有する概念であることがわかった。

Q2. 社会的孤立に対するスティグマを軽減するために有効な介入とは？

縦断調査によって、アクセプタンス&コミットメントセラピーにおけるプロセス変数である心理的柔軟性が、社会的孤立に対するスティグマの軽減に有効である可能性がわかってきた。興味深いことに、関係流動性や面子が社会的孤立に対するスティグマと関連することもわかってきており、関係流動性や面子といった心理社会的なアプローチも有効であることがわかってきた。さらに、地域レベルのスティグマの高さが孤独感を予測することもわかり、地域レベルで介入することも有用であることがわかった。

■社会心理グループ

Q1. 孤立の心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのか？

ポストコロナとなり、全体的に孤独感とコロナ恐怖が減少した。ただし、精神疾患のある者は依然として身体疾患のある者や一般の者に比べて孤立や孤独感が高く、重度の社会的孤立に陥るリスクが高いことがわかった。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

■総括グループ

孤立孤独予防教育プログラムを笠間市の政策として継続的に実施していくことになった。今後は笠間市以外の市町村や県外への周知を進めていく。またプログラムの結果の論文化を迅速に進めたい。

■精神医学グループ

大規模調査データの解析を現在進め、論文化することができた。来年度は自グループの解析に加え、他班のデータ解析を進め、その成果を元に論文執筆を進めたい。

■実験心理学グループ

当初の予定より若干遅れているものの、主要なデータ自体はほぼ取得済みであり、次年度は脳データや視線データなどの解析を進め、論文の掲載を目指す。

■臨床心理学グループ

当初の予定よりも多くの研究（縦断調査やSNS）ができているものの、研究成果については学会発表にとどまっている。令和6度は非常勤研究員を雇用することによってデータ分析と論文執筆を進めることができた。令和7年度中に論文投稿を行う。

■社会心理グループ

調査の実施は予定どおり進んでいるが、データ分析や論文執筆が遅れている。人員確保が難しいため、他グループとも協力して迅速に論文化を進めたい。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024年4月～ 2025年3月 (25回)	勉強会	オンライン	進捗報告、相談等
2025年2月	進捗会議	オンライン	各グループの進捗報告

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

■総括グループ

茨城県笠間市教育委員会の協力のもと、令和5年に引き続き残りの笠間市の中学二年生に対して孤立孤独予防教育プログラムを実施した。また東京都の堀越学園の学生に対して、授業を実施した。

また令和6年夏に、内閣府孤独・孤立対策推進室とオンライン会議を実施し、孤立孤独の予防に関して様々な知見を交換した。この会議をきっかけに、授業への見学を内閣府孤独・孤立対策推進室より打診され、令和6年秋に授業の見学の実施を行った。

更に笠間市より打診をされ、笠間市の自殺対策計画「いのちを支えあえる地域づくり計画～第2期笠間市自殺対策計画～」に孤立孤独予防教育プログラムを継続的に今後も実施することとなった。

URL : <https://www.city.kasama.lg.jp/page/page010862.html>

次年度も継続的に笠間市内の中学二年生に授業を実施していくが、教員も実施できるような体制づくりに取り組んでいく。

他に教職員の負担を考慮し、孤立孤独予防教育プログラムの流すだけで完結する教育動画を作成した。次年度はこの動画を使用し、より社会実装に向けた動きを進めていく。

■精神医学グループ

孤立・孤独を呈する代表的な状態像としてのひきこもり当事者やその支援者に対するインタビューをまとめ、孤立や孤独の発生過程や維持のメカニズムについて論じる書籍ないし報告書としてまとめる。

■実験心理学グループ

なし

■臨床心理学グループ

孤独感の低減、ポジティブな孤立の向上を目指す心理療法のプログラムは国際的にないが、本プロジェクトのまとめの一つとして認知行動療法のプログラムを開発中である。令和6年度には介入用教材は出来上がったため、令和7年度に効果検証を行う。

■社会心理グループ

なし

4. 研究開発実施体制

(1) 総括グループ

- ① 太刀川 弘和、筑波大学 医学医療系、教授
- ② 実施項目：実施項目1～7の総括（スモールスタート期間・本格研究期間）
- ③ グループの役割の説明：本グループにおいては、本プロジェクトに関わる全体会議主催、すべての研究実施項目の進捗管理、研究員の統括、行政機関との連携体制の構築を行う。本プロジェクトでは大きく4つのグループがあるが、各グループの研究知見のとりまとめと学術的評価を行う。介入研究で使用する予防教育コンテンツの制作・実施を行う。

(2) 精神医学グループ

- ① 白鳥 裕貴、筑波大学 医学医療系、講師
- ② 実施項目：
(スモールスタート期間)
 - ・社会的孤立の概念構造の解明(本格研究開発期間)
 - ・顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証
 - ・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現
- ③ グループの役割の説明：本グループにおいては、完全な孤立の一步手前の状態として、ひきこもり当事者や精神障害者に対してアウトリーチを含めた介入・インタビューを実施し、質的調査を通じて社会的孤立の概念構造の解明を行う。本格実施期間において、行政と連携し、ひきこもり者に対する直接的な介入を実施する。

(3) 実験心理学グループ

- ① 川上 直秋、筑波大学 人間系、准教授
- ② 実施項目：
(スモールスタート期間)
 - ・潜在連合テスト（IAT）によるスティグマの内在化の検討(本格研究開発期間)

- ・アイトラッカーによる社会的孤立者の視覚的情報処理特性の検討
 - ・fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討
 - ・社会的排斥経験の積み重ねによる心理的変遷の検討
 - ・潜在連合テストによるスティグマ測定 of 検討
- ③ グループの役割の説明：本グループにおいては、IAT、アイトラッカーなどの非言語的指標の使用を通して、「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」に取り組む。また、仮想的な社会的排斥操作を行うことで、排斥から孤立に至るプロセスの検討を行う。
- (4) 臨床心理学グループ
- ① 菅原 大地、筑波大学 人間系、准教授
- ② 実施項目：
(スモールスタート期間)
- ・社会的孤立の概念構造の解明
 - ・社会的孤立の代替モデルを対象とした社会的孤立深刻化のプロセスの解明
(本格研究開発期間)
 - ・顕在・潜在的スティグマ低減のための認知行動療法の効果検証
- ③ グループの役割の説明：各グループの知見を統合し、社会的孤立という概念的定義に取り組む。また、心理面接の技術を活かして、ひきこもりや精神疾患患者に対する面接調査と、SNSの投稿データを解析し、社会的孤立の深刻化のプロセスを検討する。加えて、経験サンプリング調査を行い、社会的孤立や一時的孤独への効果的な対処を検討する。さらに、顕在・潜在的スティグマを軽減させる心理教育および認知行動療法を実施する。
- (5) 社会心理学グループ
- ① 相羽 美幸、東洋学園大学 人間科学部、教授
- ② 実施項目：
(スモールスタート期間)
- ・社会的孤立者の心理的特徴の解明
 - ・孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯
 - ・社会的孤立のスティグマ尺度の作成
(本格研究開発期間)
 - ・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現
- ③ グループの役割の説明：本グループにおいては、一般成人に対する大規模調査を通して、量的研究の側面から社会的孤立の概念的定義や孤立の心理的変遷の解明に取り組む。また、社会的孤立のスティグマ尺度を作成し、スティグマ軽減の効果測定の指標を提供するとともに、パブリックスティグマ軽減の効果測定を行う。

5. 研究開発実施者

総括グループ（リーダー氏名：太刀川 弘和）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
太刀川 弘和	タチカワ ヒロカズ	筑波大学	医学医療系	教授
下条 かをる	シモジョウ カオル	茨城県立こころ の医療センター	福祉連携サー ビス部	部長
堀内 信彦	ホリウチ ノブヒコ	笠間市役所	保健福祉部	部長
齋藤 環	サイトウ タマキ	筑波大学	医学医療系	名誉教授
堀 孝文	ホリ タカフミ	茨城県立こころ の医療センター		病院長
高木 善史	タカギ ヨシフミ	岩手県立大学	社会福祉学部	講師
矢口 知絵	ヤグチ チェ	筑波大学	医学医療系	非常勤研究員
榎引 夏歩	クシビキ ナツホ	弘前大学大学院	保健学研究科	助教
石塚 里沙	イシヅカ リサ	埼玉大学教育学 部附属特別支援 学校		養護教諭
齋藤 真衣子	サイトウ マイコ	筑波大学大学院	人間総合科学 研究群	M2
田村 薫	タムラ カオル	筑波大学	医学群医学類	M2

精神医学グループ（リーダー氏名：白鳥 裕貴）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
白鳥 裕貴	シラトリ ユウキ	筑波大学	医学医療系	講師
翠川 晴彦	ミドリカワ ハルヒ コ	筑波大学 附属病院	精神神経科	病院講師
小川 貴史	オガワ タカフミ	茨城県立こころ の医療センター		医師
小松崎 智恵	コマツザキ チェ	茨城県立こころ の医療センター		医師
田口 高也	タグチ タカヤ	茨城県立こころ の医療センター		医師

実験心理学グループ (リーダー氏名：川上 直秋)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
川上 直秋	カワカミ ナオアキ	筑波大学	人間系	准教授
釣木澤 朋和	ツルギザワ トモカズ	産業技術総合研究所	人間情報インタラクション研究部門	主任研究員
荒井 崇史	アライ タカシ	東北大学	文学研究科	准教授
志澤 翔太郎	シザワ ショウタロウ	筑波大学	人間総合科学研究群	D1
横田 陽生	ヨコタ ハルキ	筑波大学	人間総合科学研究群	D1
費 思怡	ヒ シイ	筑波大学	人間総合科学研究群	D1
クリストファー・ジェード	クリストファー・ジェード	産業技術総合研究所	人間情報インタラクション研究部門心身機能モデル化研究グループ	リサーチアシスタント

臨床心理学グループ (リーダー氏名：菅原 大地)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
菅原 大地	スガワラ ダイチ	筑波大学	人間系	准教授
佐藤 洋輔	サトウ ヨウスケ	埼玉学園大学	心理学科	専任講師
柳 百合子	ヤナギ ユリコ	筑波大学	人間系	非常勤研究員
八斗 啓悟	ハット ケイゴ	筑波大学大学院	人間総合科学研究科	D1
松本 彩花	マツモト アヤカ	筑波大学大学院	人間総合科学研究科	D1
茂木 麻由	モギ マユ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M2
宮崎 珠緒	ミヤザキ タマオ	福岡県立大学大学院	心理学類	M2
榎本 理沙	エノモト リサ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M2

和田 ひかり	ワダ ヒカリ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M1
青木 ケイ	アオキ ケイ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M1
秋山 海登	アキヤマ カイト	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	D1

社会心理学グループ (リーダー氏名：相羽 美幸)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
相羽 美幸	アイバ ミユキ	東洋学園大学	人間科学部	教授
古村 健太郎	コムラ ケンタロウ	弘前大学	人文社会科学部	准教授

研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	協力内容
		笠間市保健福祉部		現場との連携調整
		笠間市教育委員会		現場との連携調整
		茨城県立こころの医療センター		現場との連携調整
Masood Zangeneh		Humber College, School of Liberal Arts and Sciences	教授	調査研究に関する助言、協力
Richard Isralowitz		Ben Gurion University of the Negev, Director of the Regional Alcohol and Drug Abuse Research (RADAR) Center	教授	調査研究に関する助言、協力
Vladimir Carli		Karolinska Institutet, Division for Suicide Research and Prevention of Mental Ill-Health Centre	講師	介入研究に関する助言、協力

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2025年 3月14日	孤立・孤独社会の行 方と予防対策	第43回 日本社会精 神医学会	浜松町コン ベンション ホール	約50名	<p><目的> 孤立・孤独分野のステークホルダー、専門家が参集し、社会的引きこもり、職場、高齢者の孤立・孤独問題と国の対策や研究プロジェクトを俯瞰的に共有することで、社会精神医学がこの問題にかかわる方向性を探る。</p> <p>座長：太刀川弘和、川上憲人 指定発言：斎藤環 登壇者：松木秀影（内閣府孤独孤立対策推進室）、白鳥裕貴（筑波大学）、川上憲人（東京大学）、藤原佳典（東京都健康長寿センター）</p>

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・子ども家庭まるごと支援テキスト 『コラム② 子どもの孤独感——不適応的な孤独と必要な孤独』 菅原大地，明石書店 2025年3月31日
- ・フリーペーパー：e-BOCCHI～ひとりぼっちでも前向きな考え方ができいざとなったら助けを求められる教育～（著者・発行者：筑波大学「社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康な「個立」を目指して」研究班、2024年5月発行）

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・「個立生活」 <https://koritsu-life.jp/> 2023年1月23日～

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・子ども家庭まるごと支援テキスト 『コラム② 子どもの孤独感——不適応的な孤独と必要な孤独』 菅原大地，明石書店 2025年3月31日
- ・太刀川弘和（筑波大学）：「一人だけ寂しくない～健康の視点から個立社会を考える～」、南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所 第14回共催シンポ

ジウム、独りでいることの社会倫理 孤立と孤独の問題性を問い直す、名古屋、
2024年8月1日

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (3件)

●国内誌 (1件)

- ・小川貴史、太刀川弘和、白鳥裕貴、中村哲也、和智萌、東理美沙、矢口知絵、齋藤環、堀孝文、新井哲明：県立精神科病院と自治体が共同して実施したひきこもり自立支援事業に関する評価. 日社精医誌, 33 : 369-379, 2024.11

●国際誌 (2件)

- ・Tamura, K., Ogawa, T., Saito, T., Shiratori, Y., Yaguchi, C., Midorikawa, H., Aiba, M., et al. (2025). The hikikomori population varies significantly depending on the definition used: Evidence from a survey in Kasama, Ibaraki, Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, First published: February 6, 2025. <https://doi.org/10.1111/pcn.13783>
- ・Kushibiki N, Aiba M, Midorikawa H, Komura K, Sugawara D, Shiratori Y, et al. (2024) How do social networks, perception of social isolation, and loneliness affect depressive symptoms among Japanese adults? *PLoS ONE* 19(4): e0300401. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0300401>

(2) 査読なし (2件)

- ・太刀川弘和 (筑波大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、川上直秋 (筑波大学)、菅原大地 (筑波大学)。社会的孤立・孤独問題にICTは活用できるのか 医療と社会 34 (1) : 71-77, 2024.6
- ・相羽美幸：中学生向け社会的孤立・孤独の予防教育プログラムの紹介 日本青年心理学会ニューズレター、94、3-4. 2024.10.21

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 2件、国際会議 0件)

- ・白鳥裕貴 (筑波大学)、小川貴史 (茨城県立こころの医療センター)、田村薫 (筑波大学)、翠川晴彦 (筑波大学附属病院)、矢口知絵 (筑波大学)、齋藤環 (筑波大学)、菅原大地 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、川上直秋 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)：「社会的ひきこもりと孤立・孤独」シンポジウム「孤立・孤独社会の行方と予防対策」、第43回日本社会精神医学会、東京、2025年3月14日
- ・石塚里沙 (埼玉大学教育学部附属特別支援学校)、櫛引夏歩 (弘前大学)、太刀川弘和 (筑波大学)：「小中学校における自殺予防に向けた教育の実践と課題」、第48回日本自殺予防学会総会、埼玉、2024年9月14日

(2) 口頭発表 (国内会議 0件、国際会議 0件)

(3) ポスター発表 (国内会議 8件、国際会議 2件)

<総括グループ>

- ① 小川貴史 (茨城県立こころの医療センター)、白鳥裕貴 (筑波大学)、中村哲也 (茨城県立こころの医療センター)、和智萌 (茨城県立こころの医療センター)、東理美沙 (茨城県立こころの医療センター)、矢口知絵 (茨城県立こころの医療センター)、斎藤環 (筑波大学)、堀孝文 (茨城県立こころの医療センター)、太刀川弘和 (筑波大学)。地域のひきこもり者に対するアウトリーチ支援の有用性の検討、第120回日本精神神経学会、札幌、2024年6月20日-22日
- ② 太刀川弘和 (筑波大学)。孤独・孤立と自殺について (総論)、シンポジウム「孤立・孤独と自殺：その予防可能性を探る」、第21回日本うつ病学会総会、大阪、2024年7月13日-14日
- ③ 榎引夏歩 (弘前大学)、菅原大地 (筑波大学)、柳百合子 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、川上直秋 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)。不適応的パーソナリティ特性と孤独感との関連—短期縦断調査による検討—、第33回日本パーソナリティ心理学会、筑波大学、2024年10月6日
- ④ 榎引夏歩 (弘前大学)、菅原大地 (筑波大学)、矢口知絵 (筑波大学)、石塚里沙 (埼玉大学教育学部附属特別支援学校)、高木善史 (岩手県立大学)、齋藤真衣子 (筑波大学)、青木ケイ (筑波大学)、米澤慎二郎 (茨城県立こころの医療センター)、柳百合子 (筑波大学)、八斗啓悟 (筑波大学)、高橋晶 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、川上直秋 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)。中学生を対象とする社会的孤立・孤独の一次予防のための心理教育プログラムの有用性の検討、第43回日本社会精神医学会、浜松町コンベンションホール、2025年3月14日

<精神医学グループ>

- ⑤ 翠川晴彦 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、古村健太郎 (弘前大学)、榎引夏歩 (弘前大学)、菅原大地 (筑波大学)、川上直秋 (筑波大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)。客観的孤立・主観的孤立・孤独と抑うつとの関連—社会的孤立・孤独に関するオンラインアンケート調査結果より、第120回日本精神神経学会学術総会、札幌市産業復興センター、2024年6月21日

<実験心理グループ>

- ⑥ 横田陽生 (筑波大学)、川上直秋 (筑波大学)、釣木澤朋和 (産業技術総合研究所)、相羽美幸 (東洋学園大学)、菅原大地 (筑波大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)。fMRIを用いた社会的排斥と潜在的個人要因の関連の検討—サイバーボール課題、潜在連合テストを用いて—、第88回日本心理学会、熊本城ホール、2024年9月6日
- ⑦ 志澤翔太郎 (筑波大学)、川上直秋 (筑波大学)、荒井崇史 (東北大学)、本田優磨 (筑波大学)、相羽美幸 (東洋学園大学)、菅原大地 (筑波大学)、白鳥裕貴 (筑波大学)、太刀川弘和 (筑波大学)。潜在的な社会的孤立を測定するIATの開発に向けて、第88回日本心理学会、熊本城ホール、2024年9月7日

<臨床心理学グループ>

- ⑧ Yanagi, Y., Aoki, K., Sugawara, D., Hatto, K., Kushibiki, N., Aiba, M.,

Kawakami, N., Shiratori, Y., Tachikawa, H., Effects of individual- and community-level stigma on loneliness:A multilevel analysis. Society for Personality and Social Psychology 2025.

- ⑨ Aoki, K., Hatto, K., Yanagi, Y., Sugawara, D., Kushibiki, N., Aiba, M., Kawakami, N., Shiratori, Y., Tachikawa, H. The effect of psychological flexibility on loneliness: Regression analysis using a curvilinear model. Society for Personality and Social Psychology 2025.

<社会心理グループ>

- ⑩ 相羽美幸（東洋学園大学）、古村健太郎（弘前大学）、川上直秋（筑波大学）、菅原大地（筑波大学）、白鳥裕貴（筑波大学）、櫛引夏歩（弘前大学）、翠川晴彦（筑波大学）、太刀川弘和（筑波大学）。コロナ禍からコロナ収束後におけるうつ、社会的孤立、孤独感、コロナ恐怖の変化—5時点の全国縦断調査から—。第48回日本自殺予防学会、埼玉会館、2024年9月14日

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (1件)

- ・太刀川弘和. 「孤立」は悪くない 「孤独」でなければ 筑波大など 抑うつ症状を分析、朝日新聞、2024年6月4日号

(2) 受賞 (0件)

(3) その他 (3件)

<プレスリリース>

- ・ The hikikomori population varies significantly depending on the definition used: Evidence from a survey in Kasama, Ibaraki, Japan.

「ひきこもりとされる人は用いられる基準によって大きく異なる」2025年2月7日

TSUKUBA JOURNAL

<https://www.tsukuba.ac.jp/journal/medicine-health/20250207120000.html>

JST

<https://www.jst.go.jp/pr/announce/20250207-2/index.html>

Eurel Alert! (2025年3月24日)

<https://www.eurekalert.org/news-releases/1078187>

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0件)

(2) 海外出願 (0件)